

## 絆のゆくえ

今江町 松倉博祥

(一)

その頃はまだ隔週の土曜日が休日であった。

ゴルフに出かけようと波佐間来馬が玄関に立ったとき、脇のトイレから異様な物音がした。

慌てて覗いて見ると息子の蒼馬が便器を抱えるように倒れている。

顔に全く生気がなく、声も出せないでいる。

慌てて呼んだ妻の玲子は「救急車を呼ばなきゃ」と大声をあげた。

それでも来馬は「君が連れて行ってくれ」と言つて、そのまま約束のゴルフに出かけて行つた。

「孫の大事」と駆け付けた波佐間慶は、担当医に執拗な質問を続けた。

血液検査の結果を告げる医師は深刻な顔で言った。

「肝機能の低下が現れている。国立病院に行つた方がいいです」  
大学病院で、肝臓に有害な銅がたまる代謝異常つまり一種の特発性銅中毒症という診断が下された。

助かるには移植しないと聞いた祖父は、脳死臓器の待機患者として日本臓器移植ネットワークへの登録を急いだ。

病状は深刻で、最優先順位の待機患者となつたが、なにしろ脳死ドナーは少ない。機会が来るのを待つては持たないかもしれない。

勿論、肝移植を申し出て判定を待つたが、残念にも身内である祖父の慶も父の来馬も、適応しなかつた。唯一OKとなつた玲子は、即座に生体肝移植の準備に入るが、来馬は難を逃れた感で胸を撫で下ろしていたのだった。

一週間後、これ以上は危険と言われたその日、奇跡にも脳死の

ドナーが見つかったと知らされ、玲子はメスを入れずに済んだ。ドナーは四十三歳の男性であった。

健康なドナーの肝臓は二つに分割され、心臓、腎臓などほかの臓器も、待機患者に提供された。

若き男性ドナーは六人の患者とその家族を救ったことになった。

蒼馬は、八歳の少年ながら救われた命を「宿命」と意識して退院した。そして高校二年となった時、肝移植の担当医であった神宮寺眞医師の講演があることをテレビで知った。

蒼馬は神宮寺に会いたいと、ひとりて入善から富山大学に出かけた。

今や「肝移植のカリスマ」と言われる神宮寺の聴講にはミラーのファンも多く、講演はいつも立ち見を用意する程の盛況だという。

俳優顔負けの風貌も人気のひとつだが、数々の立派な実績と長けた話術は、この日も聴衆を惹きつけていた。

蒼馬には講演の内容を理解できる訳もなかったが、最後まで席を離れなかった。そして講演を終えた神宮寺医師に直接声を掛けたのである。しかもその神宮寺が因縁の患者を記憶していてくれた。

そのことが嬉しく、蒼馬は感激で胸が熱くなった。

この時、蒼馬は医者になろうと決めたのである。

文系から理系しかも医学部への志望変更には、担任教諭も難色を示したが蒼馬の決意は揺るがなかった。そして見事、慶応大学の医学部に合格するのである。

当時、父の来馬はスポーツ店や骨董品の店をやっていたが、どれも傾き始め自己破産寸前だった。だから学費の捻出は厳しかった。唯幸いにも蒼馬には祖父からの遺産相続の約束があった。

その担保は、蒼馬の生涯費用にお釣りが来る位と見積もれたので大学進学に支障は全くなかった。

波佐間慶は、遺産分配に心血を注ぐ明治人間だった。

まず実子の宗成・来馬兄弟には納得のある財産分与を決めた。

そして孫の蒼馬や真秀にも生前譲渡の手続きを終え、土地の名義換えも済ませた。勿論、彼らが成人するまでの後見人に懇意の弁護士を立てた。

しかしこの時、祖父はもう一人の孫の存在を知らなかった。

当時、長男の宗成は百貨店の部長になっていたが、女にだらしなく二度も離婚して独り身だった。ところが実際には事実婚の女性がいて、嫡子認定をしていない息子も一人いた。

不始末を何度も犯した彼を、祖父は前科者呼ばわりしていたから「隠し子」など認めるわけがない。だから宗成は、実状を言い出せず、わが子への相続を諦めた。

平成元年の十月、波佐間慶は自分の父・信の三十七回忌法要を盛大に挙行した。読経、説教の終わった後、境内のお墓の前に皆を集めた祖父がいきなり激昂した。

「何故必死に生きられないか」と祖父が声を荒げた。

「自分が言うのも烏滸がましいが、波佐間の人間は普通に家族をつくれないうい。見てみる、誰ひとり女房を連れて眠る者がいない。せめて六代目のお前らが女房と一緒に名を刻んでくれ」

立派な墓石と墓誌を指差してその異常と恥辱を嘆いた。

その墓誌には女性の名が一人もない。巷間、おぞましい伝説も流れているが、奇なる事実を知るものは少ない。

勿論、当時の蒼馬には訳の分からぬ一幕であった。

これが遺言の場面となって、祖父はこの半年後、くも膜下出血で亡くなる。

あつけないその突然死は、波佐間慶の潔い覚悟と思えた。

## (二)

蒼馬は、波佐間家の冷ややかな人間関係を客観視していた。複雑な家系が原因らしいが、誰もそれについて語らない。

祖父は勿論、伯父や父のいわゆる波佐間家の面々に見え隠れする欺瞞や自信に満ちた貌が嫌だった。唾棄したい程だったから、自分は決してあははなるまいと固く決めていた。

金に不自由なく生きてきたはずの伯父と父は、遺産配分の内容を、細かく互いに見比べていた。顔が綻んでいたのは予想を超えた配分に預かったからに他ならない。

そもそも蒼馬も土塀に囲まれた大きな蔵のあるお屋敷で育ち、小さい頃から金持ちの子であった。しかも同居の慶は、欲しいものは何でも与えたから贅沢に慣れていた。

遺産なんてと一旦は権利放棄を口にしたが、父の方が慌てた。そのお蔭で、資産家となり、金に苦勞のない人生の予約ができただのである。

迷わず授業料の高い慶応の医学部を志願し、見事合格する。慶応の医学部には親が医者という裕福な者が多いが、奨学金の貸与を受け、アルバイトに追われる学生もいない訳でない。

蒼馬は、付き合い程度のバイトしかしなかったが、そんな学生らと気があった。だから坊ちゃんを羨んだり妬んだりするような奴ら避け、敢えて苦学生のみを通した。

こんな姿勢を通したからか、意外と友達はできなかつた。

その分、勤勉な学生であることが出来た。だからスムーズに国家試験もワンパスし、そのまま慶応の内科医となれた。

学生から医師になるまでの間に、小さな町でもそれなりの都市計画が進んで土地の値は高騰していく。そして蒼馬の資産は、やがて父来馬名義の財産を超えるまでになる。

何もしないのに資産が化け物のように勝手に膨れていく。

とてつもなく憑きの在る状況を空恐ろしく思うこともあった。いつの時代でも、揉み手で接近してくる連中はいるものだ。

蒼馬はそんな族の魂胆を見分ける嗅覚がついて、父みたいに下手な付き合いをして負債を抱え込む過ちは犯さなかつた。

医者となって数年後には富山中央病院に転任する機会を得る。地元に戻ると、待つてましたと結婚話が舞い込んできた。

確かにひとり暮らしは寂しいが、ふたりだから苦しくないという保障もない。長い間、自分の両親の間に溺れているぎこちない空気を見ると「結婚して幸せか」と疑いを持つ。

アラサーで、恋人もいないとなると独身主義者か同性愛者かとプライバシーが覗き込まれる。しかも土足で家上がり込むようなその勢いには辟易していた。

顔や背丈は問題でない。高学歴、高収入で職業が医者となると、どんな女も傾いてくると自惚れてもいた。

思春期に恋をしなかつたからか、素直に胸がときめかない。しかもそれが悲しいのに、焦りも怒りも段々と感じなくなつていく。

蒼馬も、そんな麻痺を感じながら、寂しく自分と対面しているアラサーの男なのかもしれない。

## (三)

いつものことだが学会の進行は国立大主導で展開する。マニユアル通り議事は進行し、予定通りの定刻閉会となる。

発表の当事者だけが賛辞を浴び、円満に学会の日程は終了する。

疑問や発想が自由に飛び交うことは滅多にない。

勢い込んで地方から初めてやって来た新人医師の多くは失望と落胆そして憤怒を覚える。

それでも、時間の経過はそれらをなだめすかしてくれる。

その夜、梅田の阪急ホテルでパーティーがあった。

有名国立大の面々がメインの席を占め、駅弁大や私大出身者は片隅にたむろしていた。

佳境に入ったころ、隣の女性が蒼馬に突然言い放った。

「あなたは富山なの？ 私、隣の金沢です。よろしく！」

「こちらこそ。お隣なら又会う機会もあるかもしれないね」

蓬沢翔子と名乗った女性は背が高く、やたら大きな眼鏡をかけいかにも女医然としていた。その隙を見せない切れ者に、いい印象はなかった。それでも数か月後、蒼馬は金沢に向いて彼女と兼六園を一緒に歩くことになる。

「失恋したことありますか？」その唐突な質問が気に入った。

「恋をしていないのに失恋はできません」と、正直に答えて蒼馬は何故か顔を赤らめた。

そして好きな理由を考える間もなく、次の約束を取り付けた。

「惚れるということがこんなことか」としみじみ思った。

良く見れば結構な美人である。透き通った肌というのはこんなことかと色白の翔子をよく見つけた。

「穴があいてしまうわ」と翔子は顔を伏せる。

蒼馬は照れ隠しの言い訳に慌てた。

年齢の割にぎこちないデートを重ねて、互いの信頼は日毎深まっていた。勉強一筋だった二人には見知らぬことや未体験なことも多く、会話が途切れることもあったが、医師という共通認識で互いに頷き合うことも多かった。

「色々体験しなければ人生や芸術が何たるかは分からない」

論理的で明確な蒼馬の言葉を翔子はいつも素直に納得した。

翔子の父は白山市の松任で総合病院を経営し、三人の姉妹が皆女医だと言う。そう聞いて圧倒され恐縮もした蒼馬だったが、想いは捨てられない。ふたりは会うべくして会った縁だと、紛れもない信頼の眼差しを交わした。

蓬沢夫婦も、外見は貧弱だが優しさと賢さが窺い知れる蒼馬にはご満悦で、婿に迎え入れたいとまで言った。

そうしてわずか交際三ヶ月のスピード結婚に至る。

「恋をしたことが無くて当然失恋もしたことはない、いわば未経験な私たちなんです」

披露宴の場で蒼馬は二人の出会いのセリフを披露して、拍手を受けた。年が二才上で、背も二センチ高い花嫁は、眼鏡をはずして、しがみつくように寄り添っていた。

披露宴の終わりに花婿の父として来馬が挨拶する番になった。

一か月前に脳梗塞で倒れた来馬は、右半身の自由が利かず、車椅子での参列であった。

花婿を超える長身とその屈強な体形は、車椅子から立ち上がった男と見えず、会場はどよめいた。

「見ての通り私は不甲斐のない親父であります、トンビが鷹を産んだのです。正直、出来過ぎた息子だと思ってます」

一言々々、たどたどしいが力強く言い切った。

話の途中には、見かけのいい父を妬んだり、もどかしいスピーチを恥じたりもしていた蒼馬だったが、ふと我に返り、これまでの無礼で愚かであった自分を反省した。

そして披露宴が終わって控室に戻った時、蒼馬は来馬に近づいてそっとハグした。老いと病いできこちなくも懸命な父を見るとごく普通の優しい息子になれた。

傍らの玲子は抱き合う父子を見てこらえきれずに涙を流した。

家庭を顧みることのなかった夫のこれまでが恨めしかったが、涙は本当に熱かった。

#### (四)

入善町と言うのは富山県東部に位置し、黒部川の下流に広がる典型的な扇状地で、人口三万の小さな町である。

波佐間慶はその町に立派な屋敷を構える素封家の五代目であつて、権威と名声に執着する人物であつた。

だが結婚運は未吉そのものであつた。

結婚を患い精神も病んだ最初の妻とは、二人の赤子がいたが容赦もなく離別した。そして時を移すことなく、残つたこどもの為継母を迎えたが、それも僅か三年で縁が切れた。小さくて心優しい嫁は体軀ごと屈強で横柄な夫に耐えきれず、波佐間家を去つた。

そうしてふたりの兄弟・宗成と来馬は、母の愛も、家の団欒も知らぬままに育つた。その為、ふたりとも何処か特異な人生観を持つようになり、共に平凡な家庭をつくることはなかつた。

ふたりが実の母に会う機会は二度設けられたが、統合失調症で無垢な人形となつた母とは心が通うはずもなかつた。

そのとき共に還暦を過ぎた兄弟だつたから、衝撃も影響も少なに留めることが出来た。

弟である波佐間来馬は、小さい頃から取り巻き連を従えて遊ぶ優越感を知つていた。

だから、しょっちゅう屋敷に友達を呼んでは遊んでいた。

中学二年の時、友達数人と幾つもある部屋を駆け回つて隠れん坊をしていた。そのひとり中川由紀夫が奥座敷に紛れ込み、来馬の父に怒鳴られ、挙句に「穢多が！」と一喝された。

当時「穢多」を知らぬ来馬であつたが、中川の被害意識は過敏

であつた。以来、来馬と由紀夫は互いに口を開くことなく、交流を断つことになる。

中川の両親は火葬場で黙々と働いていた。だが、六人の親子は部落民と言う辱めに曝され、その生活は惨めだつた。そしてある時、赤貧と差別に耐えきれず殺鼠剤服毒の心中を図つた。

両親と幼い二人の弟も死んだが、由紀夫と妹昌子が命拾ひした。

由紀夫が高校二年、妹はまだ中学一年だつた。

妹は叔父夫婦に引き取られ宮城県に行つたが、由紀夫は、民生委員や町の有志の後押しでそのまま高校に通うことになつた。

当時、生きる術を知らない少年は、周囲の善意を受け入れられるしかなかつた。

由紀夫は懸命に頑張り、東大、京大の受験も薦められるまでになつた。だが叔父と妹が住むからと、敢えて東北大を選んだ。

彼は、進学を機に故郷の入善を遠く離れ、自分のルーツたる「穢多」を抹消しようと思いを固くしていた。

だから意識して同級生との連絡を絶ち、消息不明となつた。

後年、二三次度は東京で同級生と顔を合わせたか、すぐに又顔を隠し、音信不通は三十年を超えることになる。

悔悛して出世した兄の宗成と違つて、来馬は好き放題をし、仕事も中途半端なまま、年貢の納め時とお見合いをした。

町の名家の息子と薬局の娘との縁はいわば政略結婚であつた。

兄の宗成が転勤族だつたので、次男ながら来馬がお屋敷に入つて結婚生活を始めた。すぐ子供に恵まれたが、家族ぐるみの温かい団欒の場はなかつた。母親を知らずに育つた来馬は、子どもへの愛着を形成できず、子供に懐かなかつたのはむしろ来馬の方だつた。そして来馬は、家庭を顧みず、仕事も中途半端ながら、

何十年もただ外面のいい道楽者を通した。

今は、しがねいスナック一軒のオーナーでしかないから、暇を  
持て余して遊び暮らしているようなものである。

(五)

ある日、来馬は古いハガキの束からこぼれ落ちた一枚の賀状に  
思わず「リンカン」と口走った。

リンカンというのは、中川のようなじの痣を「印鑑」と囃して、  
リンカーンを横した渾名であった。

その賀状は、墨で描いた大きな牛の足元に、夫婦の名と長男志  
籠(○歳)と書かれた昭和四十八年のものだった。

「会つて、父の暴言を詫びたい」という長年の思いが再燃した。  
来馬は、その賀状を頼りに彼を探すことにした。

パソコンを開いて検索してみると、地名変更があつて、足立区  
本木町は扇町になってた。マピオンを覗くと、彼の住んでいた  
都営団地が現存している。ここが新婚生活のスタート地点だった。

その「本木町」のHPを開いて固まってしまった。

『本町はその昔、屠場があり、部落民が混在して穢多村と言われ  
た地区だというのが、今はそれを窺い知るものはない』

恐らく中川は、これを見てこの地を離れたに違いない。  
穢多から隠れ、逃げたはずが、廻り、巡つて、気が付けば元の  
穴の中だった。出来過ぎた冗談は酷過ぎる。

封印したい『穢多』のスラムに誰が好んで住まいを構える！  
バカな己れを自嘲しながら店仕舞いして去つたに違いない。

来馬の中川探しに火が付いた。

早速上京して、団地近くの八百屋に飛び込み、中川を知る女性  
に会うことが出来た。来馬は探偵もどきの奇跡を喜んだ。

だが彼女も十年前に関西から貰つた賀状が最後で、今は音沙汰

がないという。それでも、その時のハガキはあるはずだから、探  
してみると言ってくれた。

そのフォローを期待したが、一月過ぎても連絡がない。  
焦る来馬に勘ぐりを強める玲子がいた。

来馬は「中川に会いたい。謝りたい」だけなのだろうか、他に  
何か気がついたのだろうかと不安が募つた。

そうこうするうち、最悪な知らせが届く。  
何とあの阪神淡路大震災で中川は夫婦共に被災死していたと言  
うのである。

「最後まで運のない奴」と来馬は号泣した。

徒労に終わった中川探しと残酷な訃報に、疲れ果てた来馬は腑  
抜けになった。だが、その正直な落胆ぶりからは、玲子に向けら  
れる憤怒の声は微塵も伺えなかつた。

来馬は純粹に中川を探していたのだと分かると、玲子は中川の  
死を悼みながら、静かに眠ることが出来た。

ところが心労の果て、来馬は脳梗塞で倒れてしまう。

辛い、壊死は僅かで、リハビリで恢復が期待できるというが、  
自分の身体であつて自分のものでないもどかしい毎日を送ること  
になる。

リハビリを始めて三か月も過ぎた頃だった。

新婚の嫁が見舞いに来て「こんなに似てるなんて不思議よね」  
と小説「鯉の瞬き」の巻末頁を指差した。

八重歯を出した青年が笑っているが、蒼馬と瓜二つだ。しかも  
あの中川由紀夫の面影がある。滅多にない名前からしてこの作家  
は由紀夫の息子志籠に違いない。

では何故、蒼馬がこれほどまでに彼らと良く似ているのか。  
来馬は、怪しい疑問にじつとしておれなくなつた。

来馬は、怪しい疑問にじつとしておれなくなつた。

病院では周知の父子だったので、蒼馬は父親を見舞いに寄るの  
は遠慮がちであった。今日も折角顔を見せながら、二言三言で襟  
足を搔くような仕草をして出ていった。

何げなく後姿を追った来馬の目は、白衣の襟に見え隠れする赤  
い斑点を捉えた。

ホコリと見聞違えた左腕の黒子は知っていたが、ろくに抱いた  
ことのなかった息子の襟足にある痣は初めての発見だった。

右か左はともかく、あれに似た痣は、いつかどこかで見た！  
二三日して、あの中川のうなじを思い出した。

頻繁に後ろに手をやって立ち止まる奴のポーズが浮かんた。  
この数か月「謝りたい」一心で探し回っていた男の痣と同じだ。

来馬はじつくりと首をひねった。  
「あんな痣が同じ襟足にあるとは、偶然の証ではない」

考えてみると、蒼馬は自分とは似ても似つかぬ顔をしている。  
それに頭が良くて、優しすぎる蒼馬は自分とは余りに違う。

「痣は、リンカンそのものだ。だとしたら蒼馬は……」  
来馬は頭を抱えて、部屋の中を車椅子で右往左往した。

白い八重歯を光らせて笑う、シカゴと蒼馬の顔。  
赤い襟足の痣を搔くような、由紀夫と蒼馬の癖。

一挙に疑問が、確信となっていた。  
妻に裏切られて何十年、泣くに泣けない悲喜劇である。

## (六)

週一で通う歯科医院の待合室のことだった。  
「あんた、このっさんと兄弟なげ。よう似とらっしやるわあ。

このお父さん、入善の人で私知つとらいつそ」  
そう言つて蒼馬に週刊誌を見せる女性がいた。

そこには「新人賞受賞」のタイトルよりも大きな顔写真があつ  
た。言われるように、そのシカゴ・ナカガワ（中川志篤）と言  
う若手作家は、気持ちが悪くなる程自分に似ている。

広い眉間ながら細い眉が左右に長い線を引いて、意思はまさに  
強そうだ。そのうえに低くて大きな鼻が存在の主張をまげず、分  
厚い上唇と共に威圧感を強くしている。シンメトリックな平安貴  
族の顔ではあるが、今どきのイケメンには当たらない。

蒼馬は、冷静でいられない焦りを覚えた。  
親父が同じ入善出身だとすれば、自分の両親とも何処かに接点  
があつて不思議ではない。

父が時折話題にした「秀才君のリンカン」と言うその人がシ  
カゴ・ナカガワの父親であろう。  
問題はなぜ自分が「そっくりさん」であるという事だ。

いつか誰かに「蒼馬って誰の子だ？ 父親には全く似てねえ  
な」と言われたが、その時は何ら気にならなかった。だが、世の  
中に似た者が三人いるというが、当事者となると話が違つて仰天  
する。

水と油のような仲の両親と、妙に他人行儀な父子の関係を訝る  
こともあつたが、出自の秘密を疑うことはなかった。

だがこんな写真を見せられると、きな臭い気がしてくる。  
小さいころから蒼馬と真秀は余り似ていなくて、DNAを二分

して、母親似と父親似に分かれてると言われてきた。  
妹は父親譲りの彫りの深い美形の顔立ちである。女性だからそ

れで良かった。一方の蒼馬は母親似であつたが、目鼻立ちの作り  
は平面的でマロ（麻呂）顔と言われた。体型だつて父親の方が背  
も高くてかっこいいのに蒼馬は百六十五しかなくて、足も短くて  
ジーンズも似合わない。

だから結婚披露宴で父と並ぶのは嫌だつたし妬みもした。

親子だから必ず似てなきやならないという法則はどこにもない筈だし、顔や身体、性格の違いがあつてこそ人間じゃないか。そう思いながらも「自分は本当に父親の実子なんだろうか」という疑惑が膨らんでいくのだった。

まず、自分の父親確認が、何よりも喫緊の課題だ。

例え残酷な事実であつても、疑念の靄を振り払わねばと思つた。

とにかく、あの本を手に入れようと本屋に走つた。

その本「鯉の鱗き」は、黒い地模様で垂直に泳ぐ緋鯉がひとつという装丁で、かなり大胆な表紙絵だった。

善と悪より損と得の社会に生きる男の復讐劇で、帯には著名作家の推挙文が並んでいて、売れ筋の本のようだ。

レジを済ませ、店の駐車場に慌てて走り、あらためて見たシカゴの顔に啞然となつた。

これだけ似ているのは他人の空似だけで片付けられない。

蒼馬は、自らDNA親子鑑定を急ぐことにした。

多忙ですれ違いの夫婦だが、その営みに躊躇はなかつた。むしろ自分の性本能の勢いに呆れることもあつた。

そして果てたあとにのけだるさの中で考えた。

父親の正体を知らずに、遺伝子を継いで、自分が父親となる資格があるのか。実の父を知らぬ者が子孫を残すということに罪悪の煙が燻ぶる気がする。

幸か不幸か、翔子にはまだ妊娠の兆候はない。

## (七)

文学少女だった玲子は、県で最優秀に選ばれた作文を書いた二年先輩の男性に憧れていた。大胆にも「穢多」をテーマとした苦惱の作文は、高校では伝説のバイブルとなつていた。

大学生になつて初めてその彼と会うことがあり、強引に文通を求め、三年間も続けた。それ以上の進展を拒まれて、諦めた玲子だった。数年後、偶然の再会を果たすのである。

「穢多」が故に人生を放棄せんと悩む彼に、玲子から身を投げた男と女になつた。その直後には来馬との結婚が決まっていた。

玲子にとつて憧れの人の行為は偽りのない愛ではあつたが、新たな生命まで望んだ訳でなかつた。結果として生みたいのちは、背信の子としての宿命を背負うこととなる。

難産の果てに産んだ我が子の項に赤い斑点を見つけた。その刻印は過ちの証である。躊躇いながら我が子を抱いて、泣いた。

そして産後一週目に、玲子は腕を切つて、自殺を図つた。

産後の肥立ちが悪いと思つた来馬は「人騒がせな」と詰るにどまつたが、夫婦仲は取り返しもなく冷めていった。

もともと来馬は子供が苦手で、その二年後に長女ができたものの、決して子煩悩にはならなかつた。

結婚して三十年も過ぎたが、来馬と玲子は、波風の立たない生活をしながら世に言う仮面夫婦を続けて来たのだ。

シカゴがマスコミに登場するや、玲子は彼があの中川由紀夫の息子だとにらんだ。だから逸早く小説を手に入れた。

タイトルをイメージした表紙の緋鯉が、漆黒の池から跳ね飛ぶようだ。しかも鋭い眼で睨み付けられたようで、玲子は思わず目を逸らした。頁を繰って巻末のプロフィールの顔写真に釘付けになった。作家シカゴ・ナカガワの顔が、蒼馬そのものであつた。

玲子は丁寧とその頁に鉄を入れた。

来馬にも蒼馬にも翔子にも、この顔を見せてはならない。

だから翔子が留守と聞いた時、玲子はすかさず蒼馬のマンションに駆け込んだ。部屋に入るや、ガラス戸が半開きの書棚に納ま



りきれない本が目についた。懸念したあの本そのものであった。そして恐る恐る巻末の頁を開いて、息を呑んだ。

プロフィールの頁が跡形もなくカットされ、あの写真がなくなっていた。自分と同じことを蒼馬もしていた。蒼馬も、疑念の答えみたいな写真を誰にも見せたくなかったのだ。今にも怒り狂った蒼馬が自分を殺しに現れそうな気がした。

玲子は、その本を隠すように隅に納めて、部屋を飛び出た。

そうした時に、五、六年も音沙汰のなかつた娘の真秀が突然、アメリカから帰国した。しかも前触れもなく黒人の夫と子供を連れて来たので、波佐間の家に驚愕の悲鳴が上がった。

玲子は、漆黒の皮膚をした孫を抱くことはできなかった。

因縁の蒼馬を抱くのも躊躇ったが、それとは違う何か、腕を差し出し、伸ばすことを引き留めた。

衝撃が重なった玲子は死をもつて過去の清算を図るしかない。

この何十年、嘘に縋って生きて来た人生に疲れ果てた。

そして傷痕の残る腕首に、カッターの刃を走らせた。

はからずも蒼馬が第一発見者で、手当ても早く、再び命を取り留めることになる。

意識の戻った玲子は詰問を観念していたが、自分を覗き込む来馬や蒼馬に、そんな様子がない。むしろ憐れみの眼差しと詫びの言葉が向けられて、冷たい動悸を感じた。

自殺騒ぎは、黒人の父子を連れ戻った真秀に原因があると皆が思い込んだようである。

だから、誰にも歓迎されないと知った真秀も

「安心して。私はやっぱり米国で生きていく！」と言い放った。

来馬は、真秀の息子こそ直系の孫だと認めるも、外国の血はと

もかく黒人であることがどうしても許せないでいた。だから、アメリカに永住を決めて渡る娘を、追い出すように見送った。

さすがに後味悪く思つたこの時、来馬の脳裏に炙り出しの絵のように昔の一件が現れ出てきた。蒼馬の肝移植に適合しないとされた際に父でありながら胸撫で下ろしたあの場面だ。

窮地にあるわが子を見捨てるような卑怯な行為の数々は、自ら父親の資格を放棄していたようなものだ。

ひよつとして俺は蒼馬の父ではないのかもしれない。

来馬は、DNAの結果を待たずして「蒼馬が自分の子でない」という怖い事実に行き当たつた気がした。

## (八)

父来馬が全く突然に、蒼馬に言つた。

「お前、首筋の大きな痣を知ってるか。よおく、見てみな」

病床の父が、稀有な遺伝子の証明に気がついたので。この過去を認めることは、残酷過ぎて自分よりも衝撃は大きい筈だ。

蒼馬は、父だけには知られたくないと念じていたのに、秘密の扉をこじ開けたのは父の方だった。

シカゴの写真で疑つていた出生の謎は、「痣を見ろ」と言われた瞬間に答えが出た気がした。この痣こそ、ちっぽけな自分の歴史を知っていたのだ。蒼馬は確信に近い答えを出した。

自分には来馬の血が流れていない。

その数日後、蒼馬は父子関係が否定と言うDNA判定を見る。

その上、明らかに片親のみが同じだと示唆する半兄弟指数の数値も知つた。

父来馬は、自分が実子でないを知っていたのか！

そして実際の父は、自分の存在を知っているのだろうか。

全てを知る母は必死に秘密を死守して来たに違いない。

恨むも、怒るも、はたまた許すも、自分次第になる。

暑い夏の暮れ落ちる空を見つめる父がいた。

子供は親を選べないのは不幸だ。かといって信じて疑わない子供が、自分の子で無かつたらどうなる。

それこそ愚かな男の悲劇であり、笑えない喜劇の落ちである。今の父はそれを実感している。

微妙な角度で首を傾げた父の表情から何も読み取れない。

口髭は白髪混じりでも存分にこけた頬を隠し、深い眉間の皺と一緒に、やたら鷲鼻を大きく見せて立派な男前を保っていた。だが姿勢がしよぼくれ、その整った顔を台無しにしてしまっている。

鈍いからだの動きともどかしい発声に疲れて、虚空を見つめている父には、今までの強さと勢いが消えてしまっている。

勿論、それは病身のせいだろうが、どこか穏やかな安心感のようなものも漂っていた。

蒼馬は、立場のない父の崩落を見た気がした。

この時、蒼馬は決意を新たにした。

新しい命は、愛の証であらねばならない。行為の結果、生まれたものにはそれだけの罪を背負わされる。

今、自分の存在を知らねば必ず不幸になる者がいる。

知らなければ知らないで済めば、案外と幸せかもしれない。過ちを犯した母も、それに気づかなかった父も、憐れな被害者でないか。

だから母を責めることも、父を愚弄することも出来ない。

「例え実の父が名乗り出ても認めない。絶対に会うまい」

蒼馬は、自分は波佐間蒼馬であってはならない。

何よりも「穢多」のしがらみを持ち込んでほならない。

だから決めた。

「蓬沢家の入り婿になり、蓬沢蒼馬として生きていく」と。

そして波佐間の墓に入る資格は無いと思っていた玲子も、真剣に死後離婚を考えていた。

ふたりは、この決意を言い出せずにいたが、来馬は病人の繊細さで、とうにお見通しで、それを認める用意もしていた。

そうしたある日、来馬は墓参りに蒼馬を誘った。

立派な墓石の傍らの墓誌には、五代に亙る法名が刻まれていた。

その墓誌には、新しくふたりの朱墨の名が加わっていた。

心筋梗塞で急逝した六代宗成と、自ら嫡子認定を主張し、名実ともに波佐間宗成の長男となった七代目英心で、既に法名も用意されていた。

宗成は後継者を得たが、配偶者はやむなしとして諦めた。

伯父がハンセン病という呪縛に悩む園家光子が、頑なに入籍を拒んで事実婚を続けた事情は、来馬も承知していた。

最後に、宗成は「来馬よ、お前が父に伝えてくれ」と託したが、その意に添えない来馬の無念もこの上なかった。そして墓誌に名を添えずに波佐間家を去った有縁の女性たちの物語をそれぞれ思いやるのだった。

今、墓誌にはあと一人分だけのスペースがある。

「ここに俺の名を刻めば、THE ENDだ」

来馬は、やがて蓬沢となる蒼馬にそう言って唇を噛んだ。